

# 日本語とセルビア語の視点の相違に関する一考察

## —対照言語学の必要性について—

ディヴナ・トリチコヴィッチ (ベオグラード大学言語学部)

divnaili@gmail.com

### 1. はじめに

言語を対照することで得られる情報は一つの言語を調べるだけでは得ることのできない情報である。そのため、対照言語学の重要性は以前から述べられている。また、言語を対照することで、言語・文化ごとに視点の相違も明らかになる。本稿では、日本語とセルビア語を例に、比較して得た知識が、セルビアの日本語教育などにどのような影響を及ぼすか考察したい。

まず現状について述べると、セルビアにはセルビア語話者用の日本語の教材がまだないため、授業は『初級日本語』、『みんなの日本語』などの教材を、英語版の文法解説と共に用いて、語彙や文法の適切な訳を説明しながら行っている。それにより、補わなければならない点が以下の二点である。一つ目は、語・句の意味における違いでそれぞれの社会に特有のものであるとっていいだろう。これは、日本とセルビアでは話題が異なり、同じ状態を異なる角度から見ていることによる。そして、二つ目として、文法上の視点の相違が上げられる。この点については、効果的な文型導入の順序に強く影響を与えられると思われるが、その実践方法については、研究中である。本稿では2.で語・句の意味における違い、3.で、文法の視点の相違について述べる。

### 2. 社会によって異なる視点—語・句のレベル

日本語の教科書では、必ずと言っていいほど登場人物の半分ほどが外国人であり、舞台は日本である。この設定は、学習者は日本人と日本語をある程度まで理解するため、また日本で暮らす際に日本語で困らないための助けになることは確実である。しかし、外国人として、自分の文化における大切なことが言えるようにまではならないのではないだろうか。外国語の教科書は、対象とする学習者の文化や背景からの視点も必要とされる。しかし現在出版されている多くの教科書は、対象とする学習者が多様であることもあり、ある意味で一方的に書かれており、学習者からの視点についての考察を怠っている傾向が多いようだ<sup>1</sup>。

例えば、上で述べた設定において、「失礼します」や、「ご馳走様でした」というような表現がいつ使われるかは分かりやすいが、セルビアでそれにあたる表現をそのまま訳して使うと、適切ではないことが多い。また、日本語の「ありがとうございます」と「すみません」にあたるセルビア語の表現は、使い方が異なり、逆の意味になることが少なくないのである。例えば、日本語では感謝の意味で「すみません」と言うことがあるが、この場合セルビア語では「Hvala」と言う。これは通常日本語の「ありがとう」に相当する。そこで、これをそのまま訳して使ってしまった場合、セルビア人学習者は謝罪するつもりで「ありがとう」と言ってしまう可能性もある。つまりこの階層（レベル）では言

<sup>1</sup> その傾向は変わりつつあり、Andrej Bekeš の「初級日本語文法 I、II」、また Oshima-Gerisch (et al) の「ドイツからこんにちは!」のような教科書もできている。

葉と表現だけではなく、その国・地域における習慣やマナーについて説明せざるを得ない。しかし、この階層がところどころ改善されつつあるのに対し、文法の項目においてはほとんど改善が見られないと考える。

### 3. 言語体系の違いによる視点

#### 3.1. 依頼と人称の問題

日本語の文法を学習者に理解させ、正しく身につけさせるために、適切な例文を挙げて説明するという方法が広く使用されている。そのため、「文型」・「例文」・「key sentences」などのようなものが、ほとんどの教科書に載せられている。しかし、筆者が対象となる学習者の母語を理解できなければ、何に注意を当てるべきかが不明であることが少なくない。学習者はもともと彼らの母語を元に考えるため、どれほどダイレクト・アプローチ（直接法）といっても、学習者の母語についての知識は欠かせないものだ。具体的には、以下のような問題があげられる。

例えば、セルビア語を母語とする日本語学習者にとって、大変難しいものの一つに、人称の問題がある。「～してもらいたい」という表現を例にあげると、日本国外でもよく使われており、高く評価されている『みんなの日本語 I、II』に沿って教える場合、次のような項目が以下の順番で、取り扱われる。

「～が/をしたい」、「～がほしい」（第 13 課）

「～してあげる/もらう/くれる」（第 24 課）

「～していただけますか」（第 26 課）

「～ていただきます、～てくださいます」（第 41 課）

「～させていただけますか」（第 48 課）

第 24 課にも他の課にも「～してもらいたい」という形は現れず、説明もされていない。けれども、第 48 課の練習 B の問いには、「送っていただきたいんですが」と、「直してもらいたいんですが」が、現れる。日本語母語話者にとっては、人称は問題にならないためであろうが、いろいろな点で比較的评价の高いこの教科書においてさえ、依頼と人称の関係が、学習者にとって分かりやすく説明されていない。そして、第 8 課では「コーヒーがほしいですか」「コーヒーを飲みたいですか」ではなく、「コーヒーはいかがですか」「コーヒーを飲みませんか」を使うべきだと、学習者にも分かりやすく書いてある（『みんなの日本語—初級 I 翻訳・文法解説 英語版』、88 ページ）が、「～がほしい」と「～をしたい」は三人称に使わないと書いてあるのみで、その代わりに何を言えばいいかは、書かれていないのだ。同様の傾向が、これまでに見てきた教材の多くに見られる。

動詞が人称によって活用変化するセルビア語にとって、これは大きな問題になる。セルビア語の

ジェリム ダ オトヴォリム プロゾル

ジェリム ダ オトヴォリシュ プロゾル

「Želim da otvorim prozor」の訳は、「窓を開けたい」だが、「Želim da otvoriš prozor」の訳は、「窓を開けてもらいたい」である<sup>2</sup>。両方の場合において、「したい」のは私、一人称であるが、動作主つまり人称が異なる。セルビア語ではたった一文字の違いだが、意味が全く異なるものである。しかし、これが日本語ではどう表されるべきかは、『みんなの日本語初級』を勉強し終えても分からないであろう。セルビア語でこの教科書の全体を正しく訳すことができ、文法項目を理解し覚えること

<sup>2</sup> 英語で I want to open the window. と I want you to open the window. になる。

と、言いたいことを正しく言えるようになることは、別の問題だ。なぜかという、学習者の頭の中で人称の区別を正しく把握していない恐れがあるからだ。

更に、ここで文化の違いも現れてくる。日本人にとって、こういう状態では「やりもらい」の概念が優先することが多いのに対し、セルビア人にとっては自分の依頼を伝えたいということが先に来るようだが<sup>3</sup>、この場合、セルビア人学習者がそもそももっていない「やりもらい」の概念を思い出さなければならない<sup>4</sup>。つまり、外国人なのに日本人の立場から世界を見ないと、自分の言いたいことがうまく言えなくなるのではないか<sup>5</sup>。

したがって、「～ましょうか」と「～ませんか」の違い<sup>6</sup>が、よく明らかに示されているように、セルビア人に「～たい」と動詞のテ形を教えるからすぐ、すなわち初級の段階で、「一人称が依頼の主語で、かつ、動詞が表す行為を遂行させる動作主でもあれば、～タイという形を使い、動作主が聞き手であれば、「～たい」ではなく「～てもらいたい」か「～ていただきたい」を使う」と説明する（またはセルビア語を使わずに適当な例文で分かりやすく示す）と、そのような説明がない場合と比べて学習者の誤用がより少なくなることが、今までの経験からも言える<sup>7</sup>。すなわち、日本語から一方的に見るのではなく、学習者の母語からの視点も取り入れながら、日本語の文法を調べなければならないのではないか。

上に述べたのは一つの例にすぎないが、そこから、「視点の相違」は「文化の相違」と相互に作用するのみ留まらず、かなり以前にサピア・ウォーフの仮説に述べられているように、言語の文法それぞれにまで影響を及ぼすということに目をむけたい。そうすると、文法上の細かいことだけではなく、言語の体系そのものの対照研究も欠かすわけにはいかなることが分かる。しかし、そこでは用語の不適切さが妨げになる。

### 3.2. 用語の問題

外国人として日本語を学ぼうとする際、何冊かの教科書や文法書を読んでも、それぞれの基本的な用語までも異なっており、同じものを指すにもかかわらず定義の仕方によって異なる名称を与られている。文法では、品詞と動詞の活用に関する用語が最も複雑だと思われる。品詞では形容詞の種類、特に「ナ」形容詞と呼ばれる品詞の呼び名が主な問題の一つである。いわゆる「イ」形容詞は、大抵「本物の形容詞、*true adjectives* (Bleiler 1963, McClain 1981)」だとか、または単なる「形容詞 (Alfonso 1980)」とされているのに対し、「ナ」形容詞の場合は用語が面白いほど多いのだ。伝統的な「形容動詞」を始め、「*adjectival nouns* (Martin 1988)」、「*copular nouns* (McClain 1981)」、

<sup>3</sup> 先の例からすると英語の場合でも話し手の依頼の方が優先しているようだ。

<sup>4</sup> 「やりもらい」の概念はセルビア語にも、もちろん、あるが、日本語のと大分違う。ここでは日本語の「やりもらい」の概念を指すのだ。

<sup>5</sup> しかしこれは優秀な学習者にしか不可能ではないだろうか。セルビアだけでなく他の言語においても同様の事態が起こりうるため、日本語教師はこのことにもっと注目すべきである。そうすれば、国際語として重要な言語の一つである英語のように、日本語が世界においてより一般的な言語の一つになり、また優秀な日本語話者も増えるのではないだろうか。

<sup>6</sup> 「～ましょうか」は提案する動作を話し手がするが、「～ませんか」の場合、話し手が提案する動作をしてもらいたいということが、例えば『みんなの日本語』第6課（または第13課で「～たい」との対比で）と第14課で分かりやすく指摘されている。

<sup>7</sup> これを証明するための調査は今後実施する予定である。

「名詞的形容詞（寺村 1982, 1984, 1991）」などと言ったような名前も現れる。また動詞の活用形（ベース）に関しては、用語の多様さを指摘するまでもない。伝統的な学校文法の「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「假定形」「命令形」「已然形」の代わりに、「Vmasu」「Vnai」（Makino & Tsutsui 1999, 1999a）などが使われたり、または「第一番のベース」（McClain 1981）というように番号を使って作った名前までも、同時に使われている。こういった用語の著しい数は「文法（言語の体系）の概念の違い」を示唆していると思われるが、このような大きな違いを、用語の定義だけで済ますことができるわけではない。

### 3.3. テンスのケース・スタディー

用語の壁を越えても、文法の根拠、そのカテゴリーの問題が残される。先述の人称の例のように、セルビア語においてのみならず多くの他の言語においても、時制も述語の一つの大切な文法カテゴリーである。日本語のテンスというと、議論が続いているが、四つの形が取り上げられる。使われる用語が異なるが、本稿では「ル形」「タ形」「テイル形」と「テイタ形」とする。それに合うのはセルビア語の六つのテンスなのである。<sup>8</sup>

以下の表1は、日本語とセルビア語のテンスを比較したものである。

表1：日本語とセルビア語のテンスの比較

日本語	セルビア語
非過去（ル形、テイル形）	未来 (futur I)
	現在形 (prezent)
過去（タ形、テイタ形）	過去 (perfekat, imperfekat, aorist, pluskvamperfekat)

(Tričković, Divna (2009), 273 ページを参考に (筆者) 作成)

日本語とセルビア語のテンスは数も違うし、その範囲もだいぶ異なる。まず、日本語の場合は非過去形と過去形があるに対し、セルビア語には過去形のほかに現在形と未来形がはっきり区別されている。そして過去を表すテンスが四つもある。文脈によっては、現在形も未来形も過去を表すのにつかわれる、つまり絶対テンスと相対テンスの使い方が異なるが、本稿では詳しく述べない。

さらに、述語の文法カテゴリーと意味を比較してみると、二つの大きな違いが見えてくる。一つは、日本語では2種類の形容詞において、テンスの差異が形によって示されていることだ。それはすべての品詞に非常に大きな影響を及ぼすため、とても大切な事だと思うが、その影響というものには十分に考察されていないようだ。しかし、その形容詞の特徴のおかげで、日本語の動詞は連体修飾もでき、ある程度まで形容詞に近い品詞として捉えられるのではないかと思う。この点から考えると、セルビア語の形容詞と日本語の形容詞の間には、越えられないほどのミゾがある。異なる言語において、それぞれの形容詞というものがそんなに違う場合、同じ名前で表しているのか、ということも疑われてくる。その二つ目の例は、述語ではテンスと結びつきやすい他のカテゴリーの組み合わせのことだ。

<sup>8</sup> ここから時制に関して述べることは Tričković, Divna (2009) 「セルビア語と対照された日本語の時制という文法カテゴリー」に基づいている。

それをこれから、3.4. で述べたい。

### 3.4. 述語で同時に表されるカテゴリー

一つの述語の形は、よくいくつものカテゴリーを同時に指定される。例えば、セルビア語の場合、どのテンスでも同じ語形では必ず同時にアスペクトと人称が指定される。次の表は言語それぞれの同時に現れる主なカテゴリーを示す。その他のボイス、否定および肯定、丁寧さの程度などは、本稿では取り上げない。

表 2：日本語とセルビア語の述語に現れるカテゴリーの比較

テンス変化によってできた述語	語彙的な文法上の意味	テンスの形によって得た文法上の意味
セルビア語	アスペクト	テンス、人称（数、性の区別）
日本語	状態・動作 他動詞・自動詞	テンス、アスペクト、話し手の視点

(Tričković, Divna(2009), 273 ページの表を元に筆者作成)

動詞が人称によって変化するセルビア語では、人称は必須の情報である。3.1. で上げた例から明らかであるように、日本語の動詞にも人称がないとはいえない。しかし、一般的に日本語の動詞の活用に人称が影響しないとみなされることは、セルビア語話者を大変に困らせる。アスペクトの場合もこの人称と似た側面がある。セルビア語のアスペクトは、他のスラブ諸言語のように完了形と不完了形があり、語彙のレベルで区別される。テンスの形を成すとき、正しい語彙を選択するにはアスペクトを意識しないと行けない。一方、日本語のアスペクトは、テンスの形と同時に表せる。といっても、日本語学においてそもそも日本語にはアスペクトかテンスか、どちらがあるかについても結論が出ていない。アスペクトだけがあると考える人もあれば、テンスだけあると主張する人も、両方ともあると考える学者もいる（野田 1991、寺村 1982, 1984, 1991、金水 *et al* 2003 参考）。だが、例えば、日本語の「死んでいる」が、どうして「もう死んだ」という意味になるか、「今読んでいる」のように、どうして「今死に掛けている最中だ」という意味にはなれないのか、学習者には理解しがたいので、授業中にその理論を説明しないまでも、分かりやすく説明しなければいけない。

つまり、アスペクトと時制の従属関係も無視できないが、日本語のアスペクトは必ず動詞の根本的な意味とも関連してくる。簡単に言えば、日本語の動詞は、「ある」と「する」のように必ず状態か動作を表すことによって区別される。動作を表すなら、「テイル」の形では、いわゆる瞬間動詞か変化動詞と、動作動詞の違いが見えてくる。それぞれテイル形で違うアスペクトを示す。例えば、先述した「死ぬ」は瞬間動詞であるから、「テイル」の形ではアスペクトは結果相になるが、「読む」は動作動詞だから、「テイル」の形ではアスペクトは進行相（または継続相）アスペクトになる。また、それら全てが他・自動詞の区別とも関係する。一般的に他動詞は動作、自動詞は変化を表すが、そうではない場合も少なくないようだ。もちろんこれはごく簡略化した説明なのだが、ページの制限もあるためこの程度にしておこう（金田一 1976, 1976a, 金水 *et al* 2003 参考）。しかし、これも「～ている」と「～である」という項目のところではなく、もっと早く初級段階で導入すれば役に立つと思う。

一般言語学者と認知言語学者は、従来「時」に関する必須条件は「人」と「場」のことで明確にし

てきた。それは、時制そのものは指示的な（ダイクシス）カテゴリーであるからだ。人称も同様である。そのため、時制だけ使えば、人称もある程度まで理解することができると思う。特に先ほど言及した述語に対して、文法上の意味が全部そろえば、選択肢も狭くなる。したがって、セルビア語と日本語の時制の相違の考察が何を教えてくれるか、次の例を見て考えたい。セルビア語の現在形（プレゼント）である「pišem」は、日本語の「書く」にも、「書いている」にも相当する。しかし、「書く」ならば、絶対テンスとして使われた「pišem」には相当しない。それは相対テンスの場合しか使えない。なぜかという、と、「pišem」は絶対的に使えば、発話の時に話し手が書くという動作を行うという意味にしかたないからだ。相対的だと、「書く」ことは発話時から離れ、客観的に観察されるように思われる。だから、「時」の範囲も広くなり、「毎日書く」とか「普通よく書く」とかのような意味で使われる。もちろん、この絶対テンスの進行性をもっているのは、「書いている」という形だけなのだ。しかし、人称を表していない日本語と、人称を表しているセルビア語で、同じようにその発話時から離れたり近寄ったりすることができるのは何だろうか。それは話し手の視点だと思う。そして、その視点が日本語で明らかにされることが多いため、日本語でも動作主（セルビア語における人称）が分かってくる。

#### 4. 結論

時制には人間と場所が必要とされるが、その「人間」の場所の中の位置は、いつも同じではなくてもいいのだ。ある出来事か状態に、その「人間」は積極的に参加する可能性もあるし、受動的に状態を観察することも不可能ではない。そして、言語それぞれの適切な位置があるらしい。それでセルビア語は前者の方が多いのに、日本語の場合は後者の方が多いから、セルビア語のほうが人称を使うため主観主義、日本語の方が話し手の視点を通して語るため客観主義の印象を与えるといえるだろう。テンスを習う際にもそれを意識したほうがよいと思われる。そして、このような対照研究によって、両方の言語についての知識が深められると言えよう。状態の描写と多回的な動作など、決して小さいとは言えないセルビア語の問題が、日本語と対照することにより、この話し手の視点の位置からわずかながら解けてきた。また、セルビア語と対照することで、あいまいな日本語の人称を明確にすることができるということがわかるのではないだろうか。それと伴って、人称によって動詞の活用がある言語の話者に、日本語では人称の代わりに現れる話し手の視点を、より適切に説明すれば、ある種類のエラー（誤用）が防げるのではないかと思われる。

#### 参考文献：

1. Alfonso, Anthony (1980): *Japanese Language Patterns, a structural approach*, Vol. 1 & 2. Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics, Tokyo.
2. Bleiler, Everett F. (1963): *Essential Japanese Grammar*. Dover Publications Inc., New York.
3. 金田一春彦(1976):「国語動詞の分類」, 『日本語動詞のアスペクト』(金田一春彦編). むぎ書房刊, 東京, 5 - 27頁.
4. 金田一春彦(1976a):「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 『日本語動詞のアスペクト』(金田一春彦編). むぎ書房刊, 東京, 27 - 62頁.
5. 金水敏, 工藤真由美, 沼田善子(2003):『時・否定と取り立て』, [日本語の文法2]. 岩波書店, 東京.

6. Makino, Seichi & Michio Tsutsui (1999): *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times, Tokyo.
7. Makino, Seichi & Michio Tsutsui (1999a): *A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar*. The Japan Times, Tokyo.
8. Martin, Samuel E. (1988): *A Reference Grammar of Japanese*. Charles E. Tuttle Company, Rutland, Vermont & Tokyo, Japan.
9. McClain, Yoko M. (1981): *Handbook of Modern Japanese Grammar (Including Lists of Words and Expressions with English Equivalents for Reading Aid)*. The Hokuseido Press, Tokyo.
10. 野田尚史 (1991): 『はじめての人の日本語文法』. くろしお出版, 東京.
11. 野田尚史, 益岡隆志, 佐久間まゆみ, 田窪行則 2002: 『複文と談話』, [日本語の文法4]. 岩波書店, 東京.
12. 寺村秀夫 (1982): 『日本語のシンタクスと意味』, Vol. 1. くろしお出版, 東京.
13. 寺村秀夫 (1984): 『日本語のシンタクスと意味』, Vol. 2. くろしお出版, 東京.
14. 寺村秀夫 (1991): 『日本語のシンタクスと意味』, Vol. 3. くろしお出版, 東京.
15. Tričković, Divna (2009): *Gramatička kategorija vremena u japanskom jeziku u poređenju sa srpskim* (neštampana doktorska disertacija). Filološki fakultet Univerziteta u Beogradu. (博士論文、未発表).
16. Vorf, Bendžamin Li (1979): *Jezik, misao i stvarnost*. BIGZ, Beograd.

教材:

17. Bekeš, Andrej (2000): *Prvi koraki - sodobna japanska slonica za začetno stopnjo* - 『初級日本語文法』. Univerza v Ljubljani, Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije, Ljubljana.
18. Bekeš, Andrej (2007): *Osnove - sodobna japanska slonica za začetno stopnjo II* - 『初級日本語文法 II』. Univerza v Ljubljani, Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije, Ljubljana.
19. 田中よね他 (2001) 『みんなの日本語初級1ー初級I 本冊』. スリーエーネットワーク, 東京.
20. 田中よね他 (2001) 『みんなの日本語初級2ー初級II 本冊』. スリーエーネットワーク, 東京.
21. 田中よね他 (2001) 『みんなの日本語初級1ー初級I 翻訳・文法解説、英語版』. スリーエーネットワーク, 東京.
22. 田中よね他 (2001) 『みんなの日本語初級2ー初級II 翻訳・文法解説、英語版』. スリーエーネットワーク, 東京.
23. Oshima-Gerisch, Keiko & Eriko Abe, Yoshiharu Kasai, Monika Lubitz (2008): 『ドイツからこんにちは!』. JapanPub, Germany.
24. 東京外国語大学留学生日本語教育センター (1994) 『初級日本語』. 凡人社, 東京.